

## 序 文

佐渡近代史における幻の史書とされていた『佐渡政党史稿』が復刻されることになり、喜びにたえない。この事業には幾多の困難があり、多くの労力と時間を要することを身を以て知っているからである。

偶然 原本に巡り合うという幸運に恵まれたとはいえ、編者 風間 進氏の並々ならぬ御努力がなかったら、本書の復刻刊行は実現しなかったであろう。

著者の齋藤長三は、明治から昭和にかけて活躍した佐渡政友会の重鎮で、その活動範囲は政界から経済、文化にまでわたって多彩である。したがって、内容も政治史だけにとどまらず佐渡近代の歩みともなっている。このような本書が、多くの人々に望まれながら刊行に至らなかったのには、彼の政治的立場が大きく関わっていたようである。

齋藤長三が活躍した時代は、自由党の流れをくむ政友会と改進黨系の民政党が激しく対立していた。佐渡も例外ではなく、民政党には野澤卯市がいて、この両者が戦時体制下のこの時代まで長老として残った。そして齋藤長三は、昭和十五年頃に政党史編纂を発意したと言う。当然、野澤卯市らは強烈に反発した。にもかかわらず彼が本書の執筆を継続したのは、記録や資料を次の世代に残したいという強い思いからであったと考えられる。たとえば、昭和十五年十月にそのための政党座談会を計画しているが、案内状には、今日まで政友会員として生き残ったのは自分一人となったので、政党の経歴を書き残して置きたいと訴えている。そして、原稿を謄写版印刷で関係者に送付して意見を求め、加筆、訂正を行っている。これによって何種類かの稿本ができ、その上 民政党側からの反発も大きく、ついに刊行には至らなかった。

しかし、重要な史料であることは知られていたようで、昭和二十九年創刊の雑誌『近代』に「佐渡政党史」を連載した後藤奥衛は、冒頭、『佐渡政党史稿』

が刊行されずに埋もれたことを惜しんでいる。

私が本書に出会ったのは昭和四十年代のことで、町村史を手伝う中で旧家の史料の中にその一部を散見した。何とかまとまったものをお願い、当時真野町史の編纂を担当していた本間裕亨氏の配慮で橘鶴堂文庫所蔵の稿本を見せてもらった。しかし、欠落も多く、順序も不同であった。

その後 県立図書館からも取り寄せて、本間氏と二人で複製を試みたが、ついに実現には至らなかった。

この度、編者が著者の後裔である齋藤文夫氏から委ねられた稿本を底本とし、新潟県立図書館や文書館、橘鶴堂文庫、相川文書館、野澤卯市旧宅などを訪れて克明に関連史料を収集、比較研究され、複製刊行を成し遂げられた事に、深甚なる敬意と感謝の意を表したい。

また、終始この研究と事業を支援され、刊行にあたって貴重な論文まで寄せて下さった本間恂一氏と山本修巳氏、そのほか御協力下さった多くの方々に心から御礼を申し上げたい。

未来の構想は、過去と対話してこそ正鵠を射ると言われる。時あたかも佐渡市が誕生して新たな島づくりが開始された。本書が、佐渡近代史の研究に資するだけでなく、これからの島づくりにも生かされることを切に期待するものである。

平成十七年三月一日

佐渡市教育長 石瀬佳弘